

# 地域連携による若年世代の 社会教育利用促進施策に関する一考察

— 渋川市中央公民館における「ジブンと社会をつなぐゼミ」での  
キャリア教育の実践と課題 —

森下 一成

A Study of Youth Promotion Policy of Social Educational Services in Community Cooperation  
The Practice and Problems of “The Seminar about How to Participate in Your Society”  
in the Central Community Center of Shibukawa City

MORISITA Kazunari

## 要旨

渋川市に提出した提言「地域づくりの拠点としての渋川市公民館の役割～現状分析と今後について」で、特に10歳代後半から20歳代にかけての地域活動への参加が少ないことを指摘し、この世代をして「地域活動の谷」と表現した。多世代の参加が求められる地域活動において「谷」の存在は望ましくない。この「谷」を埋める1つの実践として、渋川市中央公民館と協働し、高校生対象・子どもの居場所づくり事業「ジブンと社会をつなぐゼミ」を開催し、公民館活動に「谷」となっている世代に参加を促した。当企画のテーマは高校生にとって最も関心が高いテーマの1つである「進路」すなわち「キャリア」とした。本稿ではこの実践を通じて、地域社会の拠点としての役割が期待されている公民館に「谷」となる世代を呼び込む可能性を明らかにし、また、キャリア教育の分野において地域の持つ教育面のポテンシャルを顕在化させて活用することの意義と課題を明らかにする。

## キーワード

地域連携、地域と学校、公民館、社会教育、キャリア教育

## 1. 研究の背景

### (1) 提言の実践として

筆者は、2015年、渋川市に提出した提言「地域づくりの拠点としての渋川市公民館の役割～現状分析と今後について」<sup>1</sup>（以下、「提言」）の基礎となる調査を実施した。

当該調査において、10～20歳代の公民館利用者は全利用者の2%だった。30～40歳代を合わせても20%に満たず、地域活動の拠点というにはあまりにも利用者年齢の偏りが甚だしい<sup>2</sup>。それゆえに「提言」の1として「地域をつくる担い手を育成すること」を挙げ、その②に「『社会教育・地域活動の谷』解消のため、学齢期以降の若年層を地域活動

へ導くこと」を挙げた。本研究は、上記調査を発端とし、こうした現状にある渋川市公民館活動に変化を促すための、大学・研究者と公民館の地域連携に基づく実践的活動を背景としている。

## (2) 「地域活動の谷」

本稿でいう「地域活動の谷」とは、10歳代（特に13歳以降）～20歳代にかけて公民館活動に参加することのない世代を指す。定期利用団体の活動などをみると、小学生の参加はまだ垣間見られるが、これが中学生以降になるとほとんどみられなくなる。これは当然、中学以降の学校教育における直接、間接を問わない拘束から派生すると推察できるが、子どもを地域活動に戻し、バランスの回復について考慮する必要がある。中教審答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」<sup>3</sup>の趣旨を踏まえれば、学校教育と地域活動の関係を再考することは必然だ。こうした点から、筆者は地域と学校の新たな関わりとその枠組のために「谷」を埋める意思を示すものである。

また、現在、学校だけに知の集積があるわけではなく、地域にはさまざまな教育資源となる経験豊かな大人がともに住み、生きている。学校教育に携わる教職員よりも現実の社会に即した経験と知を有する地域の大人から知恵と経験を伝えられなかったら、その地域を受け継ぐ子どもにとって不幸な環境という見方もできる。「持続可能な開発目標」(SDGs、国連)の掲げる「質の高い教育の提供」の趣旨からしても、「谷」を埋めることが志向されねばならない。

## (3) 新学習指導要領の公示と公民館の要請

2017年3月、「小学校学習指導要領」、「中学校学習指導要領」が改訂された。今回の学習指導要領は前掲中教審答申の理念をよく掬っており、たとえば「小学校学習指導要領」総則には「教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努める」<sup>4</sup>、「家庭や地域社会との連携及び協働を深めること」／「地域における世代を越えた交流の機会を設けること」などの記述がある<sup>5</sup>。また、前掲答申は、こうした学校と協働する地域活動の拠

点として公民館を挙げているが、教育公務員による堅固な官僚制が整えられている学校とは異なり、地域活動の拠点として学校と協働する体制が既に確立しているかという視点から眺めてみると、渋川市内の公民館はいずれも道半ばと述べても過言ではない状況にある。

こうした現状を危ぶみ、「谷」となる世代、なかでも市内在住・在学の10歳代の公民館活動への参加を促す機運が渋川市中央公民館に醸成され、協議の結果、「子どもの居場所づくり事業」の一環として、この世代に的を絞った講座の企画が依頼されるに至ったのである。

## 2. 研究の目的

### (1) ニーズに合致する講座提供と利用者数との因果関係及び派生する課題の把握

「提言」の基礎調査において、10歳代からの回答数は10だった。このうち、今後希望する講座やイベントを尋ねたところ、利用者而非利用者の回答を合わせたすべての回答で、「その他」として「進路」、「将来のこと」、「就職・進学」、「受験」という記載のある回答が寄せられた。

ごく少数だが、10歳代の主たる関心事としては容易に想像できるものであり、また、中教審答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」でも、中等教育後期においては、地域の職業人等とのインタビューや対話等を含めた体験的な学習の機会を十分提供することや、人や現場を通じての自分と社会の双方への多様な気づきや発見を経験させて、将来を考えさせることが効果的であることを指摘している<sup>6</sup>。ところが、中学生以上になると、ほとんど公民館を利用しないか、あるいは暫時的に設置された自習スペースの利用にとどまる。このように公民館などの社会教育の利用から遠い10歳代の住民が「進路」すなわち「キャリア」関連のテーマであれば公民館事業（主催講座）に参加するのかを明らかにする。

本件に付随して、若年層に対するキャリア教育の意義と公民館などの社会教育施設の持つ地域の教育

力との関係にまで考察を及ぼす。

## (2) 「谷」となる世代のゼミ参加者の意識の把握

「谷」となる世代の中でも、市内在住・在学の中  
 学生・高校生の生活圏には公民館があるにもかかわらず、参加の実は上がっていない。前掲調査における公民館非利用者4名（10歳代）の「利用しない理由」として挙がっていたのは以下の項目である。「公民館があることを知らなかった」／「公民館が何をするとところかわからない」／「公民館で行われている講座やイベントに関心がない」／「仕事・家事などで時間が取れない」。サンプルとしては過少に過ぎるが、上記調査結果を踏まえて、参加者2名の公民館に対する意識を明らかにする。

## (3) 「谷」となる世代向け企画を初めて実施した社会教育主事の意識の把握

地方都市においては、「谷」となる世代へ向けた公民館講座を実施しようにも、講師招聘上の障害・コスト・学校が生活の主たる場となる生徒の都合で見送らざるを得ないことが少なくない。渋川市中央公民館においても同様の課題を抱えていた。このような環境のもとで本ゼミをどのように評価するか、本ゼミの企画の立ち上げからすべてのゼミ内容を観察した渋川市社会教育主事の意識を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1) 「キャリア」に関わるテーマによる企画の実施と観察

関心のあるテーマならば、日常生活で縁のない公民館に足を向けるか。本研究では、前掲調査時に得た10歳代の回答者の関心のあるテーマとして挙げられていた「進路」すなわち「キャリア」に関わるテーマの企画を立案・実施する。

渋川市中央公民館との協議により、対象を高校生とし、「ゼミ」として問答法で講義を進行させることから、人員を20名以下として、フライヤー（渋川市内4高校、駅前自習室＜すたでいばんく＞据え置き）、広報しぶかわ、facebookなどで周知を図ることにした。

本テーマのもとで展開されるゼミで利用者（高校

生）がどのように臨むかを観察する（参与観察）。

### (2) ゼミ参加者への調査

2日目の講義終了後、利用者それぞれに対して質問紙法あるいは面接法による調査を行う。

質問紙での質問項目は以下の通り。

- ①このゼミに参加するきっかけについて
- ②2日間という期間について
- ③このゼミの内容についての感想について
- ④ゼミを告知する媒体について（どのようなメディアを見るか）
- ⑤他に希望するテーマについて
- ⑥公民館のイメージについて

### (3) 渋川市社会教育主事への調査

利用者同様、全企画終了後に当該ゼミの企画からゼミ全体の過程において助言・指導に携わった渋川市社会教育主事・横田美由紀氏にヒアリングを行う（詳細な内容については文書にて回答を要請する）。質問項目は以下の通り。

- ①ゼミに対する評価
- ②高校生の回答に対する評価
- ③今後の展望について

## 4. 「ジブンと社会をつなぐゼミ」内容

### (1) ゼミの進め方

ゼミは2017年8月3日・4日と2日間開催。両日もとも14時～16時の2時間講義である。

ゼミの進行は問答法による。まとまった内容（「レクチャー」）を伝える場合は講義形式を取るが、長くても10分程度で、講義中も形成的評価に相当する発問は利用者に対して随時続けた。

来場した利用者に対応する数の大学生をサポート役として配し、教員とリラックスした会話の先導者となってもらい、問答法を採ることで緊張しがちな雰囲気緩和に努めた。

机の配置は三角形に組み、各辺を高校生（図1後ろ向き2人）、大学生、私が座るようにし、相対する構えにならないよう着座した（図1）。他に渋川市中央公民館の社会教育主事・横田美由紀氏が陪席し、離れた場所で事務・記録をとった。



図1 着座形態（横田氏による撮影）

利用者にはカジュアルな私服で来場してもらい、ゼミでは利用者だけでなく、サポートする学生・教員ともに相互に各自が指定したニックネームで呼びあうなど、リラックスして発言できる場の雰囲気を醸成するよう努めた。

## (2) 第1日目テーマ：時事問題／マスコミュニケーション論

第1日目に参加した利用者（高校生）は2名、大学生3名。教材は当日の新聞6紙（朝日、上毛、東京、日経、毎日、読売）と表2の内容を記載した印刷物。進行は表1、レクチャーは表2の通り。

ゼミ第一日目の概要を述べる。

表1②はアイスブレイクだが、地球は球体であるなど、自ら「事実」として認識している知識が直接的な経験ではなく、メディアに拠るところが大きいことを認識させ、レクチャー1に続けた。レクチャー1の内容については、高校生への発問と応答を主とし、大学生に対しては高校生にわかるように用語・概念・経験を説明させ、それに高校生が質問するなど、教員の一方的な話によらない活発な議論の場となるよう心がけた。こうした問答法による過程を経て、主として社会学・政治学の知見を用いながらではあるが、高校生たちはマスコミュニケーション論の基礎について学んだ。

④⑤は教材として用意した新聞各紙を用いながら、各紙の伝える事実とそれに付随する新聞のオピ

表1 ゼミ（第1日）

①	ジブンの頭の中の世界（アイスブレイク）
②	見たこと聞いたこと（アイスブレイク）
③	ふりかえり
レクチャー01	
④	新聞を読んでみる
⑤	新聞を比較してみる
レクチャー02	
⑥	気になった記事を選んでみる
⑦	ジブンと記事をむすぶ
レクチャー03	

表2 レクチャーでの学習項目（第1日）

レクチャー1	マスコミュニケーション 現代の情報流通過程 擬似環境 ステレオタイプ 知識基盤社会（knowledge based society ; OECD）
レクチャー2	主観と客観 中立ということについて ゲートキーパー メディア・リテラシー（メディアを読み解く技術） メディアの発達と「地球村」
レクチャー3	アイデンティティ アイデンティティ・クライシス ライフ・キャリア・レインボー

ニオンに気づかせ、レクチャー2に続けた。レクチャー2の内容はメディアの伝える「事実」から主観を取り除いて読み解くスキルである。

⑥⑦では、関心を持った記事について自己の見解を述べることを促し、その記事に関心を持つ自己について思考を深めさせた。それがレクチャー3につながる。レクチャー3の最後の項、ライフ・キャリア・レインボーについては、「職業人」以外の人生の役割、特に「家庭人」「市民」を扱い、キャリアの語の持つ多様性を伝えた。

以上が第1日目の内容である。

## (3) 第2日目テーマ：今後のキャリア

第2日目に参加した利用者（高校生）は2名、大学生2名。大学生のみ入れ替わりがあった。

表3 ゼミ（第2日）

①	若いて迷うこと（アイスブレイク）
②	あこがれの人は誰？（ロールモデルを探そう）
③	進路選択について
④	こんなことで人生が決まる、変わる
レクチャー 01	
⑤	人生何年って計画している？
⑥	もうちょっとで大きなブレイクスルーがやってくる？
⑦	Life Shift という考え方
レクチャー 02	
レクチャー 03	

表4 レクチャーでの学習項目（第2日）

レクチャー 01	計画された偶発性 (J.D. クランボルツ)
レクチャー 02	白書を読む。
レクチャー 03	Life Shift

ゼミ第2日目の概要を述べる。

表3 ①～③では、直面する進路について、高校2年生は文理系に分かれた後の大学や学部選択・将来の職業観を主に、大学4年生は就職先内定から振り返っての大学生活・高校在学時の大学や学部選択について、参加者が自由に自分の現状・経験について意見交換し、教員は話を引き出す役割を担った。④では特に大学生から提供された意見から、偶発的あるいは予期せぬ選択から転じた進路に着目し、選択したキャリアと予定キャリアとの差を明瞭にした上で、レクチャー01に続けた。

レクチャー01の内容は、J.D. クランボルツの「計画された偶発性」について、「好奇心」、「持続性」、「楽観性」、「柔軟性」「冒険心」の各内容を解説した<sup>7</sup>。レクチャーでクランボルツの理論を選択したのは、大学・学部の選択や就職をはじめとするキャリア形成について挫折をしてもポジティブに向き合ってほしいとの願いを込めてである。

表3 ⑤⑥⑦では、「超高齢社会」という言葉は高校・大学の授業・講義で知っているものの、その背景となる統計資料と向き合ったことがない高校生・学生

に対して動機付けとなる話題提供である。⑤では人生全体を俯瞰するために、出生から死亡までを線分で表し、これまでとこれからのライフイベントを書き込む作業である。⑥では、昨今の医療技術の進展に関する時事問題を拾いながら、⑦につなげた。ライフ・シフトはL. グラットンとA. スコットの提唱によるもので人生100年時代のワーク・ライフバランスや働き方についての構想であることから、高校生・大学生が持つ視点の1つとして適すると判断して取り上げたものである。

レクチャー02では、『平成28年版 厚生労働白書』、「小売物価統計調査（構造編）－平成27年分結果－」、「平成26年度県民経済計算について」を用いた。『平成28年版 厚生労働白書』では、平均余命から始め、平均初婚年齢などを参考に自らのライフイベントについて具体的に構想させた。「小売物価統計調査（構造編）－平成27年分結果－」、「平成26年度県民経済計算について」については、特に「どこで生きるのか」について、地域差の激しい物価や収入について事実を把握させた。県外への進学・就職などでの経済生活に具体性を持たせることがねらいである。

レクチャー03では、雑誌『週刊東洋経済』に掲載された「ライフ・シフト」の特集記事を用い、その概念を解説した<sup>8</sup>。

以上が2日目の内容である。

さらに1つのことを付言する。参加した高校生の1人の志望する学部・学科が、ゼミに陪席した横田氏のそれと同じであり、高校生は同主事からその専攻の特徴や大学・学部選び、さらには卒業後の進路に至るまで聴きたいことを存分に聴き、疑問を解消することができた。高校ではその専攻に近い科目の教員に聞いてもよくわからなかったが、この日に疑問点は解消したという。一例に過ぎないが、地域を持つ教育力のポテンシャルを示すものとして記しておく。

#### (4) 高校生に対するヒアリング（調査）

ゼミの内容が終了した後、高校生へのヒアリングを実施した。事前に質問紙を用意していたが、横田

氏との協議により、用意した質問紙をもとにヒアリングを実施して調査結果とすることが合意された。2日間のゼミを通じて、高校生がリラックスして自分の意見を物怖じせず述べる雰囲気が醸成されていたという状況を鑑みての判断であった。

#### (5) 社会教育主事に対するヒアリング（調査）

ゼミ終了後、横田氏にヒアリングを実施した（後刻、書面でも回答）。

### 5. 調査結果

#### (1) 高校生に対するヒアリング結果

上掲の質問を会話の中で取り上げ、それについての高校生2名の口頭による回答を、それぞれA、Bと分け、以下に記述する。

質問①このゼミに参加するきっかけについて

Aの回答：高校の指導だけでは将来のことが決めることができないので、参加することで考えを進めたかった。

Bの回答：将来について深く考えられるかも知れないという期待から。

質問②2日間という期間について

Aの回答：部活がある人には2日間は厳しいと思うが、私には適切だった。

Bの回答：1日の方が負担はないと思う。

質問③このゼミの内容についての感想について<sup>9</sup>

Aの回答：堅苦しくない雰囲気に驚き、その雰囲気が良かった。このゼミの内容に興味を持って参加したので不満はない。はじめて授業に参加しているという実感を持つことができた。

Bの回答：高校のようにただ先生の話聞くだけでなく、内容を教えられて、質問され、自分が回答するという過程が充実していて良かった。

質問④ゼミを告知する媒体について

Aの回答：渋川市からの情報をSNSで見ない。学校の掲示物はあまり見ない。担任の話なら記憶に残る。このゼミについてはBから誘ってもらって知った。

Bの回答：同じく渋川市の情報をSNSでは見ない。学校の掲示物は見る。保護者が「広報しぶかわ」で

の告知を見、「行ってみたら」と勧められた。

質問⑤他に希望するテーマについて

Aの回答：進路・進学・将来のキャリアについて。

Bの回答：同じく、これからのことについて。

質問⑥公民館のイメージについて

Aの回答：これまで利用したことはなく、よくわからない。最寄りの公民館がどこにあるのかもわからない。何となくお年寄りの休憩所のようなものと認識していた。

Bの回答：図書館と併設されている最寄りの公民館は入りづらく、また何をしているかわからないので、利用経験はない。図書館はよく利用する。

#### (2) 社会教育主事に対するヒアリング調査結果

横田氏からの回答は以下の通り。

##### ①ゼミに対する評価

- ・参加人数は少数であったが、いわゆる「谷」にあたる世代を対象として講座を開催できたことは意義がある。

- ・参加者があまり集まらなかったことについては、講座の内容以前にこれまで「谷」の世代に公民館が興味を持ってもらえるような取り組みをしてこなかったこと、「谷」の世代に、公民館に来てもらう習慣を作れていなかったことも大きな要因としてあげられると思う。

- ・参加者にとっては今のところ「将来＝大学進学」ということだったようだが、その少し先まで考えるきっかけが作れた。

- ・メディアを疑う（方法的懐疑）という視点は彼女たちには特に新鮮だったのではないかな。

- ・参加者自身も言っていたが、知識の詰め込みが大部分を占める高校の教育に比べて、自分で考えて自分の意見を言うという新鮮な刺激を与えられたこと、また、自分のその意見に対して講師がきちんと意見を言ってくれたことがよい刺激になったのではないかな。

- ・参加者に「知識」でなく「知」を垣間見せることができたのが一番だったのではないかな（大学の授業ってこんななんだ、大学の先生ってこんなかんじなんだ）と感じてもらえたと思います）。

・高校生のちょっと先をいく大学生が自らの経験などを話してくれたのもよかった。

### ②高校生の回答に対する評価

・今どきの高校生の情報入手手段はSNSだろうと思っていたのだが、参加してくれた方は「広報を見た親にすすめられて」とのことだった。

・また、学校の掲示物などはよく見るとのことだったので、思いのほか従来どおりの手段が若年層にも有効だと分かった。

・今後も「将来を考えるきっかけになる講座」なら参加したい、とのことだったので、今回のような、自分がどう社会に関わっていくかや「考え方の講座」が有効であると考えます。

・ただし、直接的なオープンキャンパスや職業紹介などと比べて訴求が難しいとも感じられる。

・もっと高校生に訴求するメッセージを考えなければと思う。

### ③今後の展望

・講師提案の「なるには予備校」（筆者註：住民が主体となってキャリア教育を施す筆者の構想）や、今回のようなゼミを継続して行いたい。

・参加してもらえば、有益なことはよくわかってもらえるがまず参加者を集めるためには多少、「小論文対策」「就活対策」といったメリットのわかりやすい内容を盛り込むことも必要かもしれない。

横田氏による回答は以上である。

## 6. 考察

### (1) 利用者のニーズにマッチし、地域活動ならではのサービス提供の必要性

今回のゼミのテーマは若年層のニーズに合致し、それゆえに少ないながらも利用者呼び寄せることができたといえよう。また、ニーズに合致していれば、利用者の保護者や友人など、身近な人間関係からのいわゆる「口コミ」で利用につながることも明らかとなった。

進路・進学については過多とも言える情報が流通している現代ではあるが、「将来のこと」について知る欲求が高校では満たされず、学校外の情報をど

のように整理してよいか戸惑う参加者の心情が質問①から伺うことができる。経済の進展に伴って職業分化が複雑になった現在、大学の学部等も複雑な構成になっており、このような高校生の不安は首肯しうるものであろう。高等学校教諭の多忙さを考慮すれば、これ以上の過重な負担を求めるのは酷であり、また高校生を持つ家庭に予備校など経済的な負担を課すことも避けなければなるまい。この課題を克服するには、公民館を拠点として、さまざまな職業経験を持つ住民や渋川市出身の大学生を集め、高校生の進路決定に資する活動を行うことは1つの解として、意義ある活動となるだろう。これまで、「谷」の世代へのアピールが十分とはいえない面があったことは横田氏の指摘ばかりでなく、「地域」のアピール不足でもある。地域活動の持つ教育力のポテンシャルは高いにもかかわらず、それが効果的に運用されていない。新しい学習指導要領にもあるように、地域と学校の協働に向けての準備が急がねばならないだろう。公民館（あるいはコミュニティ・センターなど）は、地域の教育力を束ねる機関として、未来の教育を左右する可能性もある重責を担っていると述べても過言ではない。

このゼミはその嚆矢であり、こうした活動の可能性は質問③に対する高校生2人の回答から明らかである。第2日目のゼミはキャリアをテーマとし、開始直後は直近の関心事である大学・学部選択の話題が多く時間を占めた。高校生らは経済的な配慮から、それまで何となく遠方の県外への進学は諦めていたが、学費、県内外の大学に進学した際の実生活費、奨学金、アルバイトなど経済を主とする大学生活について、現役大学生や教員から詳細な情報提供を行うことにより、遠方の県外の大学への進学も選択肢の1つとして視野に入れられるようになった。こうした情報提供は高校だけでなく、信頼し得るさまざまなチャネルからの提供が必要であることから、高等教育機関も説明会・オープンキャンパスで実施しているが、おそらく公民館で同様の活動をする意味はあらゆる利害から離れて為しうる点にあるだろう。反面、訴求力に欠けるきらいがあるという横田

氏の指摘は妥当であり、より合目的な講座の方向性を考えることも必要だろう。

キャリア教育、なかでも今回のゼミのテーマとなった社会形成能力の養成などは公民館だけでなく、さまざまな社会教育施設でも担うことのできる分野の1つといえよう。

## (2) 利用者によるアクティブ・ラーニングの評価

また、このゼミでは、新しい学習指導要領（2017年3月公示）に述べられる「主体的・対話的で深い学び」を意識した。ゼミの本質は対話することであり、大学でのゼミの実践を、方法についてはそのままこのゼミにあてはめて進行したが、常に問いかける刺激に高校生は当初とまどいを隠せなかったものの、始まって30分も経たないうちにしっかりと自分の意見を述べるようになった。反問されても答え、さらに教員に対する批判的な意見も述べるようになるようになり、表情に自分の意見を述べることの高揚感を垣間見ることができた。質問③Aの回答にある「初めて授業に参加しているという実感を持つことができた」との回答はアクティブ・ラーニングの有効性を物語るものであろう。質問③に派生する会話で問うたが、対話的な学習について高校では実施されておらず、国語の時間にわずかにグループ学習があるのみとの回答を得た。新しい学習指導要領解説には授業改善の3つの視点の1つとして「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める『対話的な学び』が実現できているか」という視点（註 下線は筆者）が示されている<sup>10</sup>。地域は児童・生徒との対話に応じることが求められているが、公民館は地域活動の拠点として、その役割を期待されていると述べても過言ではないだろう。横田氏の回答に「自分がどう社会に関わっていくかや『考え方』の講座が有効であると考え」とある。シティズンシップやライフ・キャリアをテーマとする教育の必要性の指摘として軌を一にするものとする。

また、学校以外の場でこそ「初めて授業に参加しているという実感を持つことができた」など、自ら

を評価する者を気にせず、自由な発言ができた可能性も指摘しておきたい。さらに、公民館等における多様な世代・立場の者とのコミュニケーションはキャリア能力の1つとされる対人コミュニケーション能力を高める上で効果的と思われる。

## (3) 社会教育・地域の教育力と学校教育の協働

質問①②④⑤の回答から伺えるのは、社会教育と学校教育との連携の必要性である。高校生のニーズとしてある「将来のこと」については当然、将来就くべき職業も含まれ、その職業と大学・学部との整合性が含まれる。これらすべてを高校に任せることは高等学校教諭にとって見れば過重な負担であるとともに、対応できない任務となる。教員の多くは、大学学部学生在籍時より教員としてのキャリアを見据え、そのキャリアを歩んでいることから、多様な職業経験に根ざしてのキャリア観を語ることはできない。

それゆえ、こうしたキャリア教育においては、学校教育と比較すると、地域の教育力の方がポテンシャルは高いと思われるが、組織化・系統化が不十分なそれをどのように引き出すかが課題となる。

このゼミは、高校生の回答によれば、学校教育の欠缺を補完する機能を果たし得たと評価できるが、企画開催時期の決定やその告知、地域と学校の機能補完が合理的に機能するためには、計画された両者の連携による実践こそ「子どもの最善の利益」に合うものであろう。

## (4) 公民館を使うためのガイダンスの必要性

質問⑥に対する回答は、高校生だけでなく、公民館を利用しない成人一般にもよく見られるものである<sup>11</sup>。そもそも学齢児童・生徒の公民館利用は多くないが、小学生までは公民館の定期利用団体に所属して活動している児童も、中学生になると公民館活動から離れ、その傾向は20代まで続き、30代になると利用者数が上向く<sup>12</sup>。筆者はこれを「地域活動の谷」と呼ぶが、こうした状況を改善するためには、公民館のみならず社会教育施設やコミュニティ施設の存在意義や利用方法に関する教育の必要性を感じざるを得ない。

なかでも公民館やコミュニティ・センターなどは地



域活動の拠点としての機能を持っており、ライフ・キャリアにおける市民としての役割を学び、シティズンシップを涵養する場でもある。学校と地域との協働が謳われる今日、学校教育で公民館等を利用するにあたってのガイダンスが実施されることが望ましい。

## まとめ

以上の考察を踏まえ、ゼミの過程及び調査結果から得られたことをまとめると、以下のようになる。

- ・「谷」となる世代のニーズに合った公民館事業であれば、時期などの調整は必要だが、新たな若年利用者を掘り起こすことができる。

- ・「谷」となる世代のニーズである進路問題は、すなわちキャリア・デザインの問題である。社会の複雑性が増しただけでなく、職業分化が複雑になったことで、若い世代のキャリア・デザインは混迷の度合いを増している。それゆえに彼らの悩みは深い。進学先・就職先の選択だけでないライフ・キャリア全体を見据えたキャリア教育が必要とされる。

- ・また、その手法は、講義方式ではなく、アクティブ・ラーニングかつ少人数教育が有効である。

- ・上記のようなキャリア教育については、人的資源が限られる学校より、多様な経験を有する地域住民を資源とする地域の教育力を発揮させることが適しており、これをどのように効果的に整えるかが課題となる。これは地域課題の1つであり、公民館に期待されるころは大である。

- ・この地域課題に対しては学校教育と社会教育の協働が「子どもの最善の利益」となる。学校教育では公民館などの社会教育施設に対するガイダンスを実施することが求められる。一方、公民館をはじめとする社会教育施設は、定期利用団体や利用者に向けて「谷」となる世代の受け入れを促し、多世代共創のもとでの社会形成能力や対人コミュニケーション能力を育成する環境を整えることが求められる。

- ・以上に提起された地域課題に対して、地域の教育力を有効に発揮するための地域連携の方法及び学校教育と社会教育との協働のありかたが今後の研究課題として射程に入るであろう。

## 謝辞

渋川市中央公民館館長・野澤利幸氏、同館長補佐・石坂博之氏、同社会教育主事・横田美由紀氏、同社会教育主事・橋爪純氏に御礼申し上げます。

## (注)

- 1 森下一成「平成27年度群馬県地域・大学連携モデル事業『地域づくりの拠点としての渋川市公民館の役割』現状分析と今後についての提言」、2016 p.18
- 2 森下一成「地域づくりの拠点としての渋川市公民館の役割その1 公民館利用者に関する調査報告」、2016 p.8
- 3 「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申)」(中教審186号)2015、中央教育審議会
- 4 「小学校学習指導要領」第2 教育課程の編成、1 各学校の教育目標と教育課程の編成
- 5 「小学校学習指導要領」第5 学校運営上の留意事項／1 教育課程の改善と学校評価等2 ア
- 6 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」2011、中央教育審議会
- 7 J・D・クランボルツ、A.S. レヴィン／花田光世ら訳『その幸運は偶然ではないんです!』2005
- 8 「LifeShift 実践編」、『週刊東洋経済』2017年7月22日号、p.26-39
- 9 この質問については、後刻、記述による回答の方がよいかと尋ねたが、2人とも話して回答できると答えたことから、社会教育主事とも合議の上、調査方法を維持した。
- 10 「小学校学習指導要領解説 総則編」第3節1 (1)
- 11 前掲事業に基づく調査による。
- 12 前掲事業に基づく調査による。

(もりした かずなり) 東京未来大学